

# 日本に持ち込まれた最古の<sup>ハワイ</sup>布哇式波乗板

## —ペンキ書き文字「PCM」の調査経過報告—

小野寺 尚希

### 1. はじめに

茅ヶ崎市博物館の基本展示室の入口の左側には、昭和2年(1927)ハワイから取り寄せた長さ約9ft(約2.7m)の日本最古と言われているサーフボードのレプリカが立て掛けられている(図1)。そのサーフボードの表面に「PCM」という文字が白くペンキで書かれており、本稿ではこのPCMの調査経過を報告する。このサーフボードについては、これまで、いくつかのメディア(書籍、Webサイト、テレビ)でとりあげられてきたが、このPCMについて言及している記事はない。このサーフボードについて史実として現在判明しているものは、1927年にハワイから取り寄せた2本のサーフボードの内、現存している1本のサーフボード(もう1本は不明)が茅ヶ崎館(註1)にあることと、昭和2年(1927)6月30日付(図5)と7月14日付(図4)の『横浜貿易新報』(現『神奈川新聞』)に当時のサーフボードについて書かれた記事だけである。



図1 日本最古級のサーフボード(レプリカ)

### 2. サーフボードの持ち主の名前

サーフボードの表に書かれているロゴや文字は現代のサーフボードの感覚からすると、ボードをシェープしたショップや工房の名前を表す一種のブランドであるが、1920年代のハワイのサーフボードはもっと機能的なものであったようだ。

まず、明治22年(1889)に設立されたアメリカ・ハワイ州ホノルルにある博物館、ビショップミュージアム(註2)に問い合わせをした。ビショップミュージアムには世界最大のハワイおよび太平洋諸島の文化遺物と自然史標本のコレクションがあり、多くのサーフボードも展示しており、ホームページにはサーフボードに関するページもある。しかし、ここではPCMの意味は不明との回答があり、代わりに、サーフィン文化遺産センター(SHACC)(註3)、エンサイクロペディア・オブ・サーフィン(EOS)(註4)を紹介された。それぞ



図2 当時のハワイにおけるサーフボードのインニシャルの例(1)

れに問い合わせしたところ、特に EOS のマット・ワルシャワ氏（註5）からの回答が非常にわかりやすいものであった。

「サーフボードにイニシャルを入れるのは、単にカスタマイズして自分のボードだと認識するための方法でした。リーシュコード（註6）もなく、誰もが同じ波に乗って転び、すべてのボードが岸まで流されてしまい、多くのボードが同じように作られていたため、これは自分のボードを他のボードと区別しやすくするものでした。誰もがこれをしていただけではありませんが、多くの人がそうしていました」

つまり、PCM は、サーフボードの持ち主の名前だったと思われる。実際、当時の写真（図2、図3）をみると、そのことがうかがえる。

そこで、当時、サーフボードを作っていた製造業者がどこなのかを質問した。ハンドメイドでサーフボードを削っていたと考え、その数は少ないはずなので、製造業者がわかれば PCM についてもっとわかるのではないかと考えたためである。ワルシャワ氏は「(当時) ワイキキには、サーフボードの製造業者など、いわゆる公式のボードメーカーはなかったと思います。サーフボードを作っている人はいましたが、おそらくビーチか、あるいは自宅で作業していたのでしょう。とても DIY 的でした。誰がボードを作ったのか、私には思い当たる節がありません。ただの「ビーチボーイ」だったのです」と回答、この時点では、サーフボードを削っていた人を探すのは困難だと考えた。

### 3. PCM のイニシャルは何か？

PCM がサーフボードの持ち主の名前を表しているとなると、どのような名前のイニシャルなのか、例えば、PCM の C と M は、Chigasaki Mori (茅ヶ崎館 森)、Chigasaki Mansion (茅ヶ崎館), Chigasaki Mayor (茅ヶ崎町長) とも思えるし、P は、Pacific や Pension (館) の P あたりなのだろうかと、勝手に想像はできるが、このイニシャルを決めた人、つまり発注した人が書き残したのを見つけるか、もしくは、サーフボードの出自を明らかにしない限りわからないのではないかと考えた。

そこで、サーフボードが茅ヶ崎館にあることから、当時の二代目館主の森信行氏の手帳や日誌にサーフボードに関連した記述がないか、あるいはサーフボードの発注伝票やハワイからの手紙など関連資料が残っていないかを現館主の森浩章氏に確認をした。石坂昌三氏の『小津安二郎と茅ヶ崎館』には、このサーフボードが庭でベンチの代わりになっていたとの記述（註7）があり、また、「二代目館主の森信行氏は非常に新しい物好きで、オートバイを取り寄せて乗ったりしていた」(現館主の森浩章氏談) ことから、彼が取り寄せたのでは



図3 当時のハワイにおけるサーフボードのイニシャルの例 (2)



図4 『横浜貿易新報』昭和2年（1927）7月14日

ないかと考えたからだ。

森浩章氏によると、現在、茅ヶ崎館はリニューアルのため休館しており、その際に、初代館主森信次郎氏や二代目館主森信行氏の所持品などいろいろ探したが、サーフボードを発注した記録やハワイから送られてきた手紙、ハガキなども含め何も見つかっていないとのことだった。また、昭和2年(1927)7月14日付『横浜貿易新報』(現『神奈川新聞』)の記事(図4)には「…海水浴場は新田町長の欧米視察の土産を加味して浴客をして充分なる満足と與(あた)ふべく町費を以て種々の設備をほどこしてある膨大なる無料更衣所、ポンプを以て井戸水をタンクに入れ紐を引けば淡水瀧の如く下る水浴場、婦人化粧室、跳ね台、オランダ籠、移動ベンチ、滑り台、ブランコ、輪投げ、布哇式波乗板は浴客をして自由に使用せしめ…」とあり、「布哇式波乗板」すなわちサーフボードは、オランダ籠やブランコなどとともに茅ヶ崎海水浴場リニューアルオープンで使用されたものだったので、これらのものとともに「茅ヶ崎館」がどこかの商社から購入したとも考えたのだが、それらに関する資料も出てきていないとのことだった。

また昭和2年(1927)6月30日付の『横浜貿易新報』(現『神奈川新聞』)に掲載されている写真付き記事(図5)には、「これは今年茅ヶ崎海水浴場で初めて使用する波乗板 新田町長の視察からハワイで見たのを取り寄せたもので材はチークで二枚到着これから澤山(たくさん)造って浴客に使用させる」と書かれている。この記事の取材先が誰なのかは不明だが、取り寄せ先、製造依頼先に当てがあったのではないと思われる。また、この記事では「サーフボード二枚が到着」とあることから、1927年にハワイから取り寄せたのか、それとも全く別のルートで取り寄せたのかを確認することに

|                                     |                                       | 1927.                                                               |              | 1928.             |              | 大正十四年             |              | 1925.             |              |
|-------------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|--------------|-------------------|--------------|-------------------|--------------|-------------------|--------------|
|                                     |                                       | 数量<br>Quantities.                                                   | 価額<br>Value. | 数量<br>Quantities. | 価額<br>Value. | 数量<br>Quantities. | 価額<br>Value. | 数量<br>Quantities. | 価額<br>Value. |
| 布 帛 雜 輸入                            |                                       |                                                                     |              |                   |              |                   |              |                   |              |
| Imports from Hawaii.                |                                       |                                                                     |              |                   |              |                   |              |                   |              |
| 外國產                                 | Foreign produce & manufactures .....  | .....                                                               | 86           | .....             | 120          | .....             | 96           | .....             | 96           |
| 内國產                                 | Japanese produce & manufactures ..... | .....                                                               | 18           | .....             | 20           | .....             | 15           | .....             | 15           |
| 輸入合計                                | Total imports .....                   | .....                                                               | 104          | .....             | 140          | .....             | 111          | .....             | 111          |
| 外國產 Foreign Produce & Manufactures. |                                       |                                                                     |              |                   |              |                   |              |                   |              |
| 動物及製品                               | Animals & products .....              | .....                                                               | .....        | .....             | .....        | .....             | .....        | .....             | 7            |
| ○                                   | 糖(日本標準第一號)                            | Sugar (under No. 11 Dutch standard) .....                           | .....        | 330               | 3            | .....             | .....        | .....             | .....        |
| ○                                   | 製菓用糖(日本標準第一號)                         | Confectioneries, cakes, jam, & fruit jelly .....                    | .....        | .....             | .....        | 2                 | 0            | .....             | .....        |
| ○                                   | 罐頭蔬菜及菓子(罐頭)                           | Vegetables, fruits & nuts (preserved, in tin-<br>bush or jar) ..... | 123          | 3                 | 178          | 4                 | 20           | 0                 | .....        |
| ○                                   | 罐頭                                    | Canned .....                                                        | 78           | 5                 | 40           | 2                 | 47           | 4                 | .....        |
| ○                                   | 貝殻                                    | Shells of mollusca .....                                            | 1,285        | 35                | 924          | 63                | 105          | 7                 | .....        |
| ○                                   | 各種化學药品及藥劑                             | oils, fats, waxes, perfumes & preparations chemical                 | 2            | 0                 | .....        | .....             | .....        | .....             | .....        |
| ○                                   | 其他化學藥品及藥劑                             | All other drugs, chemicals & medicines .....                        | .....        | .....             | 1            | .....             | 1            | .....             | .....        |
| ○                                   | ペイント(其他)                              | Paints (other) .....                                                | 2            | 0                 | .....        | .....             | .....        | .....             | .....        |
| ○                                   | 麻或麻及マニラヘム                             | Hemp, jute & Manila hemp .....                                      | .....        | .....             | .....        | 100               | 3            | .....             | .....        |
| ○                                   | 印刷用紙、写し紙、刷用紙等                         | Printed books, copy books, drawing books &<br>periodicals .....     | .....        | .....             | 3            | .....             | .....        | .....             | .....        |
| ○                                   | 鐵(重鉄)                                 | Iron (waste or old) .....                                           | 1,569        | 8                 | 2,820        | 14                | .....        | .....             | .....        |
| ○                                   | 自転車                                   | Cycles .....                                                        | .....        | .....             | .....        | 1                 | 0            | .....             | .....        |

図6 『大日本外国貿易年表』掲載の「布哇輸入」

#### 4. 新田町長の海外視察の足跡とハワイ寄港

次に、昭和2年（1927）6月30日付の『横浜貿易新報』（『現神奈川新聞』）の記事に書かれた「新田町長の視察からハワイで見たのを取り寄せたもの」を手がかりに、新田町長は、大正14年（1925）



図5 『横浜貿易新報』昭和2年  
(1927) 6月30日

した。『大日本外国貿易年表』（註 8）（図 6）の布哇輸入一覧を調べてみたところ、昭和 2 年（1927）のハワイからの輸入品目分類で Paints (other) で「数量 2」と記述されており、おそらくこれが「二枚のサーフボード」であろうと推測した。そこで、現横浜税関に当該の品目についての送り主、受取人について問い合わせたが、「今回お問い合わせいただいた件は、約 100 年前のことですので、横浜税関にはその当時の記録等は残っておりません」との回答で、この「数量 2」がサーフボードである確認は取れなかった。

海外自治視察の帰国途上でハワイに寄港した際、ホノルルでサーフボードを入手するために、なんらかの手配をして、2年後の昭和2年(1927)に2本のサーフボードをハワイから取り寄せたのではないかと考え、海外視察の足跡を調査した。

『茅ヶ崎市史』では、「新田町長の欧米視察旅行」の項目において、「大正十四年二月、全国町村長会は、副会長福沢泰江をはじめとする第一回海外自治視察団を欧米に派遣したが、新田もその一員としてこれに参加した」(註9)と述べられている。全国町村長会(註10)は現存しており、「第一回海外自治視察団」のハワイ寄港の記録を含め旅程について問い合わせたところ、「本会の当時の機関紙『斯民』が、本会では大正15年からの分しか保管されていないため大正14年の記録を確認できません」とのことだった。

しかし、大正13年(1924)11月刊の『斯民』(図7)掲載の海外自治視察団募集要項の記事には「全国町村長會より現職町村長を海外視察の爲め派遣せしむるの件は、曩(さき)に臨時總會に於いて協定せられたるが、今回愈々(いよいよ)其の人選を了(おわ)り、左の如く決定したり。(全国町村長會幹部員中より)長野縣上伊那郡赤穂村長 福澤泰江、(中略)神奈川縣高座郡茅ヶ崎町長 新田信、宮城縣牡鹿郡石巻町長 平塚喜市郎、三重縣三重郡常盤村長 中村博一郎、岡山縣都窪郡萬壽村長 古屋野橋衛」と5人の視察団派遣が決定され、新田町長はその一員であることが確認できた。

余談ではあるが、『斯民』に掲載された9月3日の帰国時の船上での写真をみると、実際には、4人だったようだ(図8)。

次に7ヶ月にも及ぶ旅程について、大正14年(1925)11月刊の『斯民』に、新田町長が投稿した「全国町村長會派遣欧米諸國に於ける自治行政状況等視察員の旅行道程」と題した詳細な旅程記事が掲載されている。

そこには、「十八日 正午桑港(サンフランシスコ)出船帰朝の途に就く△廿四日 布哇島寄港△九月三日横濱港着」とあり、8月24日にハワイ(ホノルル港)に寄港していると記されている。この記述により、ハワイ寄港は確認できたが、ハワイでは、どこへ行ったかなどの詳細な記録は書かれていない。

次項からは、新田町長のハワイにおける具体的な動向について、ホノルルでの滞在時間、ホノルル港からワイキキビーチ往復の移動手段、現地でのコミュニケーションという視点から検討を試みる。

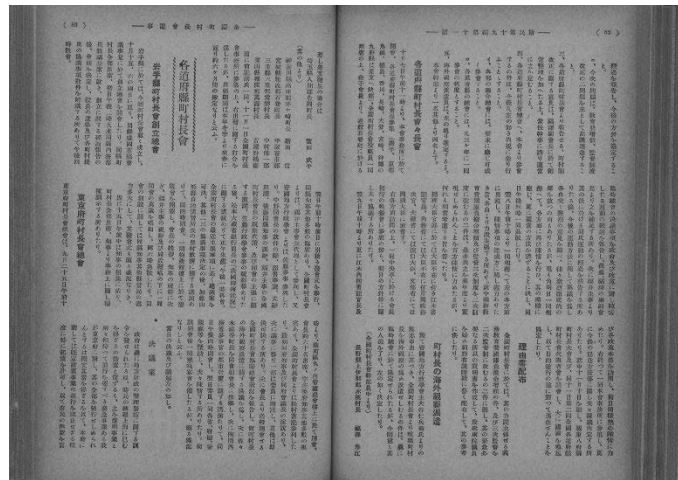


図7 『斯民』19巻11号(大正13年(1924)11月刊)



図8 『斯民』19巻11号掲載の  
9月3日帰国時の船上写真

## 5. ホノルルでの滞在時間

大正 14 年 (1925) 9 月 3 日付『横浜貿易新報』に新田町長が帰国した時の記事が掲載されており、それによると新田町長が乗船した船は、東洋汽船の大型客船・さいべりあ丸であったことがわかる (図 9)。8 月 24 日にホノルル港に到着したさいべりあ丸の滞在時間について日本郵船歴史博物館に問い合わせしてみた。しかし、「大正 14 年 (1925) 2 月～9 月頃のさいべりあ丸のスケジュールは残されておらず、正確な事は判りません」とのことだった。また、停泊時間については「同航路に配船されている船は、基本的に「日本／サンフランシスコ」の「行き／帰り」に、約 2 週間に一回、ホノルルに寄港しており、時間までは判りませんが、その日の内に入出港していました。この当時の Log Book (航海日誌) が残されていないため、あくまで想像の域を出ませんが、数時間の停泊というのは有り得ません。サンフランシスコからホノルルに入港の際、同じ米国内であり入国・検疫手続きも無くすなり着岸したと思われますが、そう多くないとは言え乗客・荷物の乗降、水や食料の補充、貨物の積み下ろしがあり、目視が可能で操船がしやすい朝に入港し、夕方に出帆するのが一般的で、最低でも半日は停泊していたと思われます」との回答であった。この点については、その後の調べで、後掲のアウトリガー・カヌー・クラブの歴史家、マリリン・カリ氏によると、8 月 24 日にホノルル港に入港した運航スケジュールを調べたところ、さいべりあ丸がホノルル港のピア 7 (アロハタワーの東側の第 7 棧橋) (註 11) に午前 7 時に入港し、午後 4 時に出港したことを確認しており、上記の日本郵船歴史博物館からの回答と一致していることから滞在時間は 9 時間ほどあったと思われる。

## 6. ホノルル港からの移動手段とコミュニケーション

当時のハワイの日系人の割合を調べてみたところ、驚くことに、「大正 9 年 (1920) には、ハワイ準州の人口の中で日系人の占める割合が全体の 42.7%」(註 12) とハワイの人口の半数近くが日系人であった。新田町長がハワイに寄港した 1925 年は、その前年の 1924 年に「1924 年移民法」(ジョンソン・リード法) が成立し、事実上、移民のための日本人の入国を禁止した年の翌年だったので、日系人の数はピークだったと思われる。そのことから新田町長がホノルルで多くの日系人に会えたことや日本語でコミュニケーションができたことを考えると、9 時間の滞在時間の中で安全に効率よくワイキキビーチとホノルル港を往復し観光するには日系人が運営しているホノルル観光案内を利用したのは想像にやすい。

アアラ自動車組合寄港船客案内内部 (Aala Automotive Union Port of Call Passenger Information Department) が日本人乗船客向けに制作した「ホノルル案内」(図 10) というハワイ・ホノルルの地図と観光名所のガイドがセットになった案内パンフレットがホノルル港に到着した乗船客に配布されていたようである。このパンフレットはホノルルで運営していた日系人の自動車協会兼タクシー会



図 9 『横浜貿易新報』大正  
14 年 (1925) 9 月 3 日

社が日本人乗船客向けに発行していたものだった。パンフレットの表にはアアラ自動車組合寄港船客案内がホノルル警察署の承認を受けていること、東洋汽船と日本郵船会社が協議して一定の価格で日本人の寄港船客のホノルル案内サービスを提供している旨が記されていた。さらにアアラの船舶部主任が栈橋前で着船から出帆まで待機していたと記されているので、栈橋で到着した乗客に、このパンフレットを配布していたと思われる。また、このパンフレットに書かれたダイヤモンドヘッド廻りコースでは「ワイキキ海岸は音に名高き土人の波乗り妙義をご見物後…」(原文)とあり、サーフィンを見るコースが組み込まれてあったようだ。以上のことから、さいべりあ丸から下船した新田町長もこの案内パンフレットを受け取って、ダイヤモンドヘッド巡りコースを選び、ワイキキビーチでサーフィンを見物したと考えられる。

## 7. サーフボードを作った人と日系人の大工



図 11 エスター・  
キアアイナ議員

2024 年 10 月、茅ヶ崎市ホノルル市・郡姉妹都市友好協定締結 10 周年の一環としてホノルル市議会議員数人が茅ヶ崎市博物館を訪問した。その際、エスター・キアアイナ議員(図 11)に調査中のサーフボードについて

相談したところ、ハワイのデューク・カハナハモク・ファンデーション(註 13)に連絡をとるようアドバイスを得た。問い合わせたところ、エグゼクティブ・ディレクターのサラ・フェアチャイルド氏が対応し、彼女は、有名なレジェンドサ

ーファーであるフレッド・ヘミングス氏(註 14)へも PCM の意味を尋ねてくれたが、彼もその意味はわからないとのことだった。その後、歴史家から入手した日本の大工の写真を送ってきてくれた(図 12)。

彼女によると、アウトリガー・カヌー・クラブ(以下、OCC)(註 15)の初期には、日本人の大工がハレ・ペリ(註 16)の増築やその他のプロジェクトに携わっていたという。また、OCC はクラブメンバーのサーフボードを実際に作製もしていたとのことで、送られてきた「ワイキキビーチで作業する日本人の大工の写真」について、その日本人大工がサーフボードも作製した可能性があるかもしれないということだった。しかし、サーフボードを作製中の彼の写真を見たことはないとのことだった。

新田町長がホノルルでサーフボードを購入しようとした際、現地でのコミュニケーションを円滑に

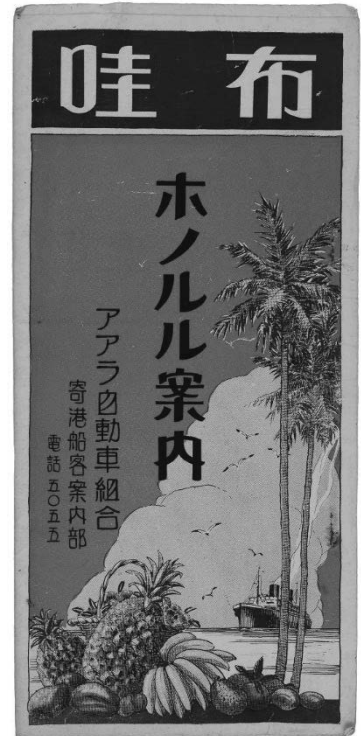


図 10 日本人乗船客向け「ホノルル案内」



図 12 Photo by Hawaii State Archives

図るため、この日本人大工と新田町長が接触した可能性があるのではないだろうか。そこで、その日本人の大工がサーフボードの作製や販売にどう関わっていたかなどの実態を知るために、OCC の歴史家であるマリリン・カリ氏を紹介していただいた。

マリリン・カリ氏によると、当時ワイキキで、主にサーフボードを作っていたのは、アウトリガー・カヌー・クラブのキャプテンであったジョージ・ダッド・センター氏（註 17）と、OCC 会員であったエドリック・クック氏の 2 人であった。主に OCC の会員向けにサーフボードを作成、販売していたのは、彼ら 2 人だけだったようだ。彼らは、ホノルル港に停泊していた船から数ブロック離れたホノルル市街のパンチボウル通りとキング通りの角にあるルワーズ&クック材木置き場（第 7 桟橋から直線で 500 メートルほどの場所）に出向いてサーフボードに適した幅 24 インチのレッドウッドの板を購入し、それを板状に加工していた。個人でも板を購入し、ガレージでサーフボードを自作していた。多くの OCC 会員やビーチボーイが、自分のボードに名前やイニシャルを入れていたのは確かで、さらにマリリン・カリ氏は当時の会員名簿を確認したが、PCM のイニシャルを持つ人物はいないとのことだった。



図 13 日本最古級のサーフボード  
(原品、茅ヶ崎館所蔵)

日本人大工については、「当時、OCC には日本人大工 3 人が在籍していました。1 人目は、1908 年頃から 1941 年までロッカールームと売店を管理していた不動産管理人の S. Sasaki です。2 人目は、1912 年の帳簿に名前が記載されている O. Yoneda で、彼は月給 10 ドルで、Sasaki の補佐として不動産管理を担当していました。おそらく、カヌーの修理やパドルの製作、草葺きの小屋の修繕を担当していた大工は彼だったと思われます。ファーストネームは記載されていません。3 人目は Yamamoto (「YAMA」) で、1913 年に月給 13.30 ドルで雇われ、やはり Sasaki の補佐を務めていました。詳細は不明です。1913 年以降、帳簿には従業員のみが記載され、個人名は記載されなくなりました。これらの情報の一部は、初期の OCC メンバーの口述による歴史から得られたものです」との回答であった。

マリリン・カリ氏の回答から、サーフボードを作製したのは日本人大工ではなく、OCC の 2 人であったことが判明した。

新田町長が何らかの方法で日本人大工に連絡を取ってジョージ・ダッド・センター氏やエドリック・クック氏に作製依頼した可能性について質問すると、「OCC 理事会議事録には、そのような取引に関する記録も言及もありません」とのことだった。

また、「その日（8 月 24 日）の英字新聞の広告欄を調べ、誰かがサーフボードを売りに出していないか確認しましたが、該当する広告はありませんでした」とのことで、その日たまたま新聞に売りに出されていたサーフボードを買ったという可能性もなかったことが分かった。

マリリン・カリ氏からは「新田町長がサーフボードを手に入れたシナリオとして最も可能性が高いのは、サーフボードが売りに出された際に、誰かに頼んで二本送ってもらったというものです。これ

らのサーフボードは特別に作られたものではなく、誰かのイニシャルが入っていた可能性も考えられます。そして、新田町長から委託を受けた誰かが、サーフボード2本を入手し、日本へ送ったのでしよう。なお、サーフボードが売りに出されるまでに2年もかかったことについては、船の都合による問題があったとは考えにくいです。なぜなら、日本行きの船は週に数回ホノルル港を通過していたからです。また、サーフボードは米国本土からの旅行者が最初に購入し、彼らの出発時に売却した可能性もあります。当時、旅行者は船でハワイに到着し、モアナ・シーサイドホテルに3~6ヶ月滞在することが一般的でした。なお、ハワイへの航空便は1930年代後半まで存在していませんでした」とアドバイスをいただいた。

以上のことからPCMがサーフボード所有者の名前のイニシャルであるならば、指摘にあったようにサーフボード購入をした米国在住者の名前を示すのではないだろうか。1920年代の米国では「ポール」「フィリップ」「ポーリン」「パール」といった名前は人気があり、チャールズやキャサリンなどのミドルネームも広く使われていた。このことを踏まえて想定される名前を以下に列挙してみた。

男性名：フィリップ・チャールズ・ミラー、ポール・クレイトン・ミッチェル、パトリック・クラレンス・モーガン、ピーター・コンラッド・メイソン、パーシー・セシル・マッシュューズ

女性名：ポーリン・クレア・ミラー、パトリシア・セシリア・モーガン、パール・キャサリン・ミッチェル、フィービー・シャーロット・メイソン、ペネロペ・クララ・マッシュューズ

これらは推測にすぎないが、PCMというイニシャルを持つ人物が存在した可能性は否定できない。中古のサーフボードが売りに出されるのを待っていたというマリリン・カリ氏のシナリオは理にかなっているように思われた。新田町長が大正14年(1925)に帰国してから2年後の昭和2年(1927)に日本に届いた時間的なギャップも説明できそうだった。ただし、この場合、日本に届いた2本のサーフボードにそれぞれ別のイニシャルが付いていた可能性がある。しかし、茅ヶ崎館に保存されているサーフボード(図13)は1本しか残っておらず、現存しているサーフボードもイニシャルが削られている状態なので、それがPCMであるかどうか確認できないため、2本のサーフボードのイニシャルを比較することができない。もし何か科学的な方法でPCM以外のイニシャルを判読できたら、大きな手がかりになるのは間違いない。

## 8. 日系人のシェイパーの存在

スタンフォード大学のHOOVER INSTITUTION LIBRARY&ARCHIVESから、1935年7月1日付の『実業のハワイ』に掲載された興味深い記事が見つかった(註18)。

「アロハ・キュリオ・ストアの光榮

今回の帝国練習艦隊の寄港で同胞商店中一番の光榮に浴した店はアアラ公園前、アロハキュリオ店の河野磯松氏夫妻である。それは艦隊停泊中、畏くも伏見宮博英王殿下に於かせられては市内ご見学の御途次アロハキュリオ店に御立寄り遊ばされて布哇産コア細工品をお買上に相成り又、八雲御乗組の朝香宮正彦王殿下に於かせられてはサーフボード(波乗板)作製のご下命を賜はり河野氏夫妻を始め店員一同一代の光榮として感激して居る次第である。日本内地などでは到底思ひも寄らぬ事であるが、幸いにも布哇に住居する御蔭でこの光榮に浴した事を河野氏は一般顧客に感謝の意を表してゐる。猶ほサーフボード作製の御用はモイリイリ穴戸コア工場が謹製したのである」

この記事は、サーフボードが日本に輸入された昭和 2 年 (1927) からすでに 8 年が経過しているが、宍戸コア工場においてサーフボードを作っていたことが判る。問題は、宍戸コア工場がいつからサーフボードを作り始めていたかである。なお、『日布時事布哇年鑑 昭和 3 年版』(註 19) には、以下の名前と住所が記載されている。

宍戸 勇 廣嶋 コア工場員 2632 Waiola St.

また、このアロハキュリオ店は、前述したアアラ自動車組合寄港船客案内が日本人乗船客向けに製作した「ホノルル案内」のパンフレット(図 10)の広告枠にお土産物店として掲載されている店(図 14)で、北キング街アアラ公園前にあり、さいべりあ丸が停泊していたホノルル港第 7 棧橋から 1km 程度のところにあったので、ダイヤモンドヘッド巡りの観光でサーフィン見物をした後、新田町長らは、この店を訪れた可能性はある。もしその際、サーフィンを見て感激した新田町長がアロハキュリオ店主の河野磯松氏にサーフボードの購入についての打診をしていたら、「今は扱っていないが、扱うようになったら連絡する」旨、返事をしたのかもしれない。こう考えるのは、前述した「新田町長が大正 14 年 (1925) に帰国してから 2 年後の昭和 2 年 (1927) に (サーフボードが) 日本に届いた時間的なギャップ」をさ

らに説明できる可能性があるからだ。すなわち、河野磯松氏が、OCC 製のサーフボードが売りに出されたのを見つけて新田町長に連絡したか、宍戸コア工場のように日系人がサーフボードを作製できるようになって連絡したと考えられる。さらに、後述する南カリフォルニアで商業的にサーフボードを 1929 年に販売し始めた時期などを考慮すると、PCM サーフボードは、売りに出された OCC 製サーフボードか、日系人が作ったサーフボードか、南カリフォルニアのサーフボードかという 3 つの出自の可能性が考えられる。

## 9. 南カリフォルニアのサーフボード

ホノルル案内のパンフレット(図 10、図 14)は、茅ヶ崎市のサーフショップ、フリュードパワーサーフクラフトの牧野拓滋氏の所有で、「1930 年前後は、サーフボードが手作りでオーダーメイドする時代から商業ベースで生産、販売する移行期であり、もしかしたら、PCM は『Pacific Coast Model』の略で、カリフォルニアで作られたものではないか、もしくは、ハワイでカリフォルニア向けに作ったサーフボードにつけた名前ではないか」とのアドバイスを受けた。そこで、EOS のマット・ワルシヤワ氏に確認したところ、EOS の Web サイトに、カリフォルニアのパシフィック システム ホームズ サーフボードについて二つの記事が紹介されていた。

「パシフィック システム ホームズ サーフボード

1908 年に設立されたパシフィック・レディカット・ホームズ(当初の社名)は、プレハブ住宅のラインナップを製造し、自社の作業員が現場で配送・組み立てを行っていました。1929 年、Pacific System Homes の共同設立者の一人の息子で、カレッジに通うマイヤーズ・ビュートが、会社でサーフボードの製造と販売を説得しました。サーフボードは 22 年前に南カリフォルニアに紹介されていましたが、1920 年代後半まで、生産ラインでの組み立てを促すほどボードの需要が高まることはありませんで



図 14 「ホノルル案内」に掲載された

した。1929 年後半から 1930 年前半にかけて製造された最初のパシフィック・システム・ホームズのボードについては、レッドウッドの板をラグボルトでつなぎ合わせたもので、おそらく長さ 10 フィート、重さ約 70 ポンドであったという以外、ほとんど知られていません。1932 年までに、パイン材とセコイア材の板がオール・セコイア材の板に取って代わり、オール・セコイア材で縁取られたバルサ材の板は、重量わずか 45 ポンド、価格 40 ドル以下で、1930 年代半ばに発売されました。これらはすべて、プランク時代を象徴する典型的なもので、丸みを帯びた先端、四角く切り落とされたテール、ほぼ平行な側面を備えていました。1938 年には、ホノルルで有名なアウトリガー・カヌー・クラブの公式ボードとなりました。パシフィック・システム・ホームズは、アメリカが第二次世界大戦に参戦した直後にサーフボードの製造を中止しました」

「サーフボードはウッドクラフト

パシフィック システム ホームズの最初のボードは、フィンなしのレッドウッド単板で重さ 70 ポンド（約 32kg）の 1 枚板でした。ビュートは、これは重すぎると考え、翌年には軽量の人工乾燥バルサ材を大量購入しました。1932 年以降、パシフィック・システム社のボード（すべて一枚板で、ブレイク様式のくぼみはなし）は、バルサ材のコアとレッドウッドを側面、ノーズ、テールに使用していました」

最初の記事では、「サーフボードを生産、販売開始したのが、1929 年後半から 1930 年」とあり、日本に PCM のサーフボードが輸入された 1927 年と 2 年のずれがある。また、「1929 年後半に生産・販売し始めたサーフボードは、レッドウッドの板をラグボルトでつなぎ合わせたもの」と書かれていたが、もう一つの記事には、「フィンなしのレッドウッド単板で重さ 70 ポンド（約 32kg）の 1 枚板」とあるので、最初に作製したサーフボードは、PCM のサーフボードと同じ一枚板であることから、販売開始した 2 年のずれを除けば、パシフィック・システム・ホームズのボードを完全に否定できないので引き続き検証を続けたい。

## 10. まとめ

以上が、2025 年 1 月までに調査した経過である。PCM の意味解明に的を絞って進めてきたが、結局、サーフボードの出自を明らかにしないと解明できないことが判った。

当初、このサーフボードはハワイに新たに作製を依頼したボードで、PCM は作製した工房の名前だと考えていた。しかし、それが所有者の名前であったということが新たに判った点は大きい。その後、その所有者の名前と PCM に関連する手がかりが見つからず調査が行き詰まっていた時、ホノルル市議会議員エスター・キアアイナ氏の来館で再び動きだし、別の所有者のサーフボードが売りに出るのを待っていた可能性もあることがでてきた。これは、新田町長のホノルルの滞在時間やどこへ行ったかなどの記録はなかったが、当時のホノルル寄港する船舶や港の記録、ハワイのサーフィン文化、日本からの移民の状況を調べた結果ともいえる。

今後の課題は、「新田町長が大正 14 年（1925）に帰国してから 2 年後の昭和 2 年（1927）に（サーフボードが）日本に届いた時間的なギャップ」を埋めるために、日系人によるサーフボードの販売・作製の実態調査、カリフォルニアのパシフィック・システム・ホームズのサーフボードについての検討を深めていく必要がある。

その一方で、そもそもこのサーフボードは、二代目館主の森信行氏が発注したものなのか、新田町

長が発注したものなのか、という命題は依然として残ったままであり、この解明が「PCM サーフボードがどのようなルートで日本に持ち込まれたのか」というルーツをはっきりさせ、PCM 調査に重要な手がかりになると考える。これについては、1926 年度の茅ヶ崎町の予算や帳簿にサーフボードの購入に関する記載があるかどうか、新田町長にホノルルからの手紙、はがきが届いているかどうか、新田町長と同行した 3 人の資料などの調査が合わせて必要である。

(謝辞) PCM サーフボード調査に際しては、以下の多くの人のご協力をいただいた。茅ヶ崎館現館主の森浩章氏、全国町村長会、横浜税関、日本郵船歴史博物館、茅ヶ崎市博物館図書室、ビショップミュージアム、サーフィン文化遺産センター (SHACC)、エンサイクロペディア・オブ・サーフィン (EOS) の Matt Warshaw 氏、ホノルル市議会のエスター・キアアイナ議員、デューク・カハナモク・ファンデーションのサラ・フェアチャイルド氏、アウトリガー・カヌー・クラブのマリリン・カリ氏、サーフショップ、フリュードパワーサーフクラフトの牧野拓滋氏から多くの資料、ご助言をいただいた。皆様に心より感謝申し上げます。

(註)

註 1: 神奈川県茅ヶ崎市にある登録有形文化財

([https://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/bunka\\_rekishi/shiteibunkazai/1006259.html](https://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/bunka_rekishi/shiteibunkazai/1006259.html))

註 2: ビショップミュージアム (Bishop Museum) (<https://www.bishopmuseum.org/>)

註 3: サーフィン文化遺産センター (SHACC) (<https://www.shacc.org/>)

註 4: エンサイクロペディア・オブ・サーフィン (EOS) (<https://www.eos.surf/>)

註 5: マット・ワルシャワ氏は、『SURFER Magazine』の元編集者であり、サーフィンに関する本を 6 冊執筆している。彼の作品はニューヨーク・タイムズ紙、エスクァイア誌、ウォール・ストリート・ジャーナル紙にも掲載されている。ニューヨーカー誌では「世界屈指のサーフィン研究家」と評され、オックスフォード英語辞典のサーフィンに関するコンサルタントも務めている。ワルシャワ氏は南カリフォルニアで生まれ育ち、1980 年代初頭にはプロサーファーとして活躍した。また、カリフォルニア大学バークレー校で歴史学の学士号を取得している。

註 6: リーシュコードは、サーフボードが波によって遠くに流されるのを防ぐため、サーフボードとサーフィンをしている人を繋げるために使われている。通常、リーシュコードは足首や膝に取り付けられ、サーフボードと人が離れないようにする役割を果たす。

註 7: 「石坂昌三『小津安二郎と茅ヶ崎館』(新潮社、1995 年)」

註 8: 「大蔵省『大日本外国貿易年表 昭和 2 年 下篇』(大蔵省、1929 年)」

註 9: 「茅ヶ崎市『茅ヶ崎市史 4 通史編』(茅ヶ崎市、1980 年) P575

註 10: 全国町村長会 (<https://www.zck.or.jp/>)

註 11: ビア 7 は、現在はフォールズ・オブ・クライドという現存する最後の鉄製 4 本マストの帆走式の石油タンカーとして停泊している突堤、第 7 棧橋。

註 12: ハワイ州観光局が運営する公式ラーニングサイト (<https://www.aloha-program.com/curriculum/lecture/detail/28>)

註 13: DUKE KAHANAMOKU FOUNDATION, デューク・カハナモクの精神と遺産を永続させる個人や組織の発展を財政的に支援する財団 (<https://www.dukefoundation.org/>)

註 14: Fred Hemmings, ([https://en.wikipedia.org/wiki/Fred\\_Hemmings](https://en.wikipedia.org/wiki/Fred_Hemmings))

註 15: アウトリガー・カヌー・クラブ (<https://www.outrigercanoecub.com/>) は、1908 年に設立された世界屈指の海洋スポーツクラブである。創設者アレクサンダー・ヒューム・フォード氏の使命は、ハワイのサーフィンとカヌーパドルリングというスポーツを永続させることであった。クラブは、フォード氏が想像もできなかったような形で成功を収めている。

註 16: ハワイ・アライブ・プロジェクト (<https://hawaiialive.org/hale-pili/>)、ハレ・ピリは、伝統的なハワイ社会における住居で蔓草の民家のことである。それは、それぞれの構造物に明確な役割が割り当てられていた。カウハレ (またはホームステッド) は、ハレ・ノア (カフから解放された家)、ハレ・ムア (男性の集会所)、ハレ・クケ (炊事場)、ハレ・ベア (月経用家屋) など、必要とされる住居から構成されることが多かった。住居の一般的な場所は、その土地の地理によって決定されることが多かった。マウカ (山手) の住居はロイまたはハレ・クア (タバ製造用の小屋) を中心に構成されることが多く、マカイ (海岸部) に住む人々はハレ・ヴァア (カヌーハウス) を中心に生活することが多かった。伝統的なハレは、オロナ製の紐で結合された在来種の木材で建てられていた。ピリ草は、新しいハレに心地よい香りを加える好ましい屋根葺き材であった。ラウハラ (Pandanus の葉) やティの葉を束ねたもの (ピーアと呼ばれる) も、屋根葺き材として使用されていた。

註 17: デューク・カハナモク・ファンデーション (<https://www.dukefoundation.org/inductee/george-dad-center>) 誰もが「Dad (お父さん)」を必要としており、ジョージ・デビッド・センターはハワイの海洋スポーツ界にとって完璧な存在であった。熟練したアスリート、コーチ、指導者、そして何よりも若いウォーターマンやウォーターウーマンの良き助言者であった彼は、海洋スポーツ界に数十年も前に残した功績は、今もなお語り継がれている。コーチしたすべての人から「Dad(お父さん)」の愛称で親しまれたセンターは、ハワイのスイマー、サーファー、パドラー、バレーボール選手、陸上選手たちが最高のパフォーマンスを発揮できるよう、惜しみなく時間を割いた。1920 年ベルギーアントワープオリンピックでデューク・カハナモクと米国水泳チームをコーチしたことは、彼のキャリアのハイライトであった。米国チームを素晴らしい成績に導き、デューク・カハナモクが 100 メートル自由形で金メダルを獲得するなど、米国チームの活躍に貢献した。Dad (お父さん) は常にスポーツマンシップとチームスピリットを推進した。それは、男性が海のスポーツを支配していた時代に、女性や子供向けの運動プログラムを育成したことでも明らかである。現在、毎年開催されるダッド・センターレースは、誰もがスポーツに参加できるという彼の信念を称える、女性向けのアウトリガーカヌーレースの最高峰となっている。

註 18: 邦字新聞デジタルコレクション (<https://hojishinbun.hoover.org/ja/newspapers/jnh19350701-01.1.12>)

註 19: 『日布時事社編輯局『日布時事布哇年鑑 : 附・日本人住所録 Hawaiian Japanese annual & directory 日布時事布哇年鑑并人名住所録』(日布時事社、1928 年)